

退院支援において看護学生が学んだ看護師の役割

—退院支援における多職種連携を通して—

An Influence of Nurses on Nursing Students in Discharging Support: Through Multidisciplinary Cooperation in Discharging Support

佐藤亜月子, 城野美幸, 岡潤子, 志田久美子,
小葉祐子 (帝京科学大学)

Atsuko SATO, Miyuki JONO, Junko OKA, Kumiko SHIDA,
Yuko KOGUSURI (Teikyo University of Science)

要約：本研究は、統合実習をとおして退院支援に向けた多職種連携における看護師の役割について学生の学びを明らかにすることを目的に取り組んだ。対象は、統合実習を履修した看護学科4年生11名である。研究方法は半構造化面接法を行った。分析方法は、学生が学んだ退院支援に向けた多職種連携における看護師の役割に焦点をあて、それに関する内容のデータを抽出し、内容分析を行った。その結果、学生は多職種連携における看護師の役割は【退院支援に必要な情報を多職種に発信し共有する】【専門的な視点で退院支援に向けた患者の生活について情報収集する】【退院支援に向けた患者・家族の意向に沿う多職種との調整】の3つのカテゴリーと、16群の同一記録群に分類された。これらのことから、学生は多職種連携において看護師の役割を専門的な視点で情報収集し、中心的な役割を担っていると捉えていた。また学生は多様な視点から看護師の役割について学びを深めていることが明らかになった。

I. はじめに

超高齢社会に伴い、医療の高度化、疾病も複雑化し、専門性の高い医療の提供が求められている。質の高い医療を提供するために、各種の医療専門職が専門性を活かし、協働・連携することは必須であり、多職種連携の推進が期待されている。

平成20年の診療報酬改定により、退院調整に加算が認められた。厚生労働省より医療機関から在宅医療に推進するための方針が打ち出されたが、患者の老老介護、核家族化、継続医療の問題により、医療機関から退院後に次の場所へ移行することが困難になることが多く、病院でも退院支援に向けた取り組みが強化されている。病院では、退院調整部署が設置され、院内だけの連絡調整だけでなく、院外や関連部署への連絡調整をする専従の看護師を置く病院も増加している。

厚生労働省「チーム医療推進について」の取りまとめの報告書(厚生労働省, 2016)では、看護師は「チーム医療のキーパーソン」であると位置づけられ、多職種の連携・協働を推奨していく上で、看護師に期待されている役割は大きい。看護師は役割を認識し行動することが必要であり、学

生が統合実習を通し退院支援に向けた多職種連携における看護師の役割をどのように捉えているのかを明らかにすることは、看護師がチーム医療のキーパーソンとしての役割行動の内容を明確にすることになり、重要な意義がある。

本学では、4年次に基礎看護学領域の統合実習の目的として、「看護が保健医療福祉チームの中でどのように展開され、継続されているかを理解する。また、看護管理の視点に基づき、看護者に期待される役割を理解することにより、看護実践能力の向上を目指す」ことを目的に、統合実習を開講している。今回、多職種連携における退院支援に向けた看護師の役割について焦点をあて、学生の学びを明らかにするため、本研究に取り組んだ。

II 統合実習の概要

1. 目標

- 1) 対象者の特性や保健医療福祉チームを取り巻く環境の視点から、看護活動が行われている場の特性について学ぶ。
- 2) 保健医療福祉チーム内での情報共有、および看護ケアを継続する方法を学ぶ。
- 3) マネジメントとしてのリーダーとフォロワー

が、どのように役割分担して看護ケアを継続しているかを学ぶ。

4) 看護実践における自己の課題を明確にすると共に、自己研鑽をする必要がわかる。

2. 実習時期と単位

4年生 前期

3. 単位

3週間 3単位

4. 実習施設

退院支援室および退院支援関連部署がある総合病院。4施設で実施した。

5. 実習スケジュール

1週間は学内で実習に必要な知識を習得するための自己学習を行う。

2週間で病棟と外来、および地域連携室、退院支援室などで実習する（表1参照）

6. 実習方法

病棟では、病棟師長、リーダー、フォロワーに同行し、見学およびインタビューを通して看護の実際を知る。外来および地域連携室・退院支援室等では、部署の指導者に同行し、見学およびインタビューを通して活動の実際を知る。毎日、カンファレンスを行い学びの整理、共有する。

Ⅲ 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究

2. 研究対象

平成28年度統合実習（基礎看護領域分野）に出席した学生は15名であった。そのうち、同意が得られた看護系大学4年生11名を対象にした。

3. 収集方法

実習の評価を担当していない教員が、インタビューガイドを用いて半構造化面接を行い、データを収集した。インタビューは承諾を得て、ICレコーダーに録音をした。インタビュー内容は、①看護師は退院支援に向けた多職種連携においてどのような役割を担っていたか、②看護師の実際をみて、どのようなことを考えたか、③退院支援に向けた多職種連携において、看護師に期待される役割はどのようなことであるか、についてである。

表1 実習スケジュール

週	内容
1週目(学内)	施設ごとのオリエンテーション
	インタビュー内容の作成(外来師長、病棟師長、認定看護師)
	事前学習課題を補い整理
2週目(施設)	施設ごとのオリエンテーション
	看護部長からの病院の理念・組織図・看護方式等の説明
	外来のオリエンテーション
	外来師長(外来責任者)に同行して見学
	外来患者に同行
	外来看護の見学
	専門看護師・認定看護師について見学
医療安全管理室・感染制御室・地域連携室の見学	
3週目(施設)	病棟のオリエンテーション
	病棟師長に同行して見学
	病棟のチームリーダーに同行して見学
	保健医療福祉チームカンファレンスに参加
	病棟のフォロワーに同行して見学
	施設ごとで全体発表
	全体発表

4. 調査期間

平成28年10月～11月

5. 分析方法

- 録音内容を学生別に対応表を作成し逐語録にした。逐語録は、メンバーで繰り返し読み込み、Berelson. Bの分析を参考に、問いは「学生が学んだ退院支援に向けた多職種連携における看護師の役割は何か」として、回答文を「学生が学んだ退院支援に向けた多職種連携における看護師の役割は〇〇である」とし、それに関する内容のデータを切片化し文脈単位を抽出した。
- 文脈単位から一内容を含む一文章を記録単位に分割し、文脈を変えないようコード化した。
- 記録単位は類似性に従って同一記録単位群を抽出、さらに統合させてカテゴリーとした。Berelson. Bの内容分析を参照とした理由として、分析対象とする記述から傾向を明らかにしたり、何らかの特性に関する研究に活用

できる研究方法であり、今回、表現された内容から、学生の学びの傾向を明らかにするために用いた。分析にあたっては、質的分析の経験が豊富な共同研究者と意見交換し、真实性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

対象者に口頭と文書で研究目的、面接内容の録音、匿名性の遵守、拒否の理由、データの管理、結果の公表について説明し同意を得た。インタビューをする際は、評価に影響しないよう評価を担当していない教員が、実習の成績が学生に伝わった後にインタビューを行った。本研究は、A大学の人を対象とする研究に関する倫理審査会の承認を受けている。

IV. 結果

インタビュー時間は平均24.8分間(12分~36分)であった。退院支援に向けた多職種連携における学生が学んだ看護師の役割は3つのカテゴリと、16の同一記録群、96のコードに分類された(表2)。

以下、カテゴリを【 】, 同一記録群を<>, 記録単位を「 」で示す。

1. 多職種連携との【退院支援に必要な情報を多職種に発信し共有する】について

このカテゴリは、<患者の生活について多職種に伝え共有すること><患者の状態について伝え共有すること><自宅での患者の希望を伝え多職種に共有すること><多職種が求める情報を多職種に伝えること><看護師としての分析内容を伝え共有すること><家族背景や思いについて多職種と共有すること>の6つの同一記録群が構成された。

記録単位は、「患者の思いや今後どうしていきたいかをしっかりくみとった情報を医師、薬剤師、作業療法士に流すこと」「看護の視点から自分の意見を言うこと」「家族からくみとった思いを作業療法士と情報交換すること」「退院後の生活についてケースワーカーと話し合うこと」などであった。

2. 多職種連携との【専門的な視点で退院支援に向けた患者の生活について情報収集する】について

このカテゴリは、<退院後の患者の生活について情報を収集すること><多職種からの専門的な視点について情報収集すること><入院するまでの患者の経過について情報を収集すること><多職種が必要とする情報を収集すること>の4つ

の同一記録群で構成された。記録単位は、「理学療法士、医師などが必要とする情報も意図的に把握すること」「事前に多職種に患者の現状からどのようにすればよいのか情報をもらうこと」「退院後、一人暮らしなのか、老老介護なのか、介護ができるのかといった情報を収集すること」「一人暮らしになる方は、自分で服薬ができるのか、一人暮らしに対しての不安について訪問看護師の必要性の有無を情報収集すること」などであった。

3. 多職種連携との【退院支援に向けた患者・家族の意向に沿う多職種との調整】について

このカテゴリでは、<退院後の生活について多職種と調整すること><多職種間の調整を中心に担うこと><患者と家族の意向に沿うように多職種と調整すること><多職種の特性を理解し調整すること><他施設との調整をすること><退院支援カンファレンスでマネジメントすること>の6つの同一記録群が構成された。記録単位は、「患者が納得できるように退院調整をすること」「カンファレンスを通して介護士やソーシャルワーカーと退院後の生活について話し合うこと」「多職種間の仲介役(潤滑剤)になり連携すること」「中心に立って多職種と関わりながら、患者のことを考えること」などであった。

V. 考察

実習に参加した学生から得られた退院支援に向けた多職種連携における看護師の役割の内容を分析した。その結果、学生は、看護師の役割を【退院支援に必要な情報を多職種に発信し共有する】【専門的な視点で退院支援に向けた患者の生活について情報収集する】【退院支援に向けた患者・家族の意向に沿う多職種との調整】をすることと学んでいた。丸岡ら(2004)は、病棟看護師は関係職種・機関との調整を実施しており、退院調整の中心的な役割を果たしていたことを明らかにしている。

看護師と職種間の連携実態を調査した結果では看護師が一番多く多職種と情報交換を行っており(石鍋ら, 2000: 袖山ら, 2012), 学生も看護師が多職種に【退院支援に必要な情報を多職種に発信し共有する】場面を見学し、看護師の役割であることを捉えていたと考えられる。【退院支援に必要な情報を多職種に発信し共有する】の内容として、<自宅での患者の希望を伝えること>や<家

表2 学生が学んだ退院支援に向けた多職種連携における看護師の役割

記録単位(抜粋)	同一記録群(数)	カテゴリ
退院後の生活について多職種と情報共有を密にすること/患者や家族の性格を含めて、患者の退院後の生活について全部を分かった上で、退院調節の視点で理学療法士、医師に意見を出すこと/患者の生活について(多職種に)発信すること/退院後の生活についてケースワーカーと話し合うこと/退院後の暮らしについての考え、外来受診はできるかという情報を多職種と共有すること	患者の生活について多職種に伝え共有すること(12)	退院支援に必要な情報を多職種に発信し共有する
医師、医療ソーシャルワーカー、検査技師、放射線技師と関わる時、患者の状態、現状を分かりやすく看護の視点で伝える/外来看護師は退院調整看護師や入院の説明をする看護師、病棟の医師と看護師と患者の状態を申し送りをする事/理学療法士、医師、ソーシャルワーカーと患者の状態についての情報を交換すること/患者の状態について医師・薬剤師、多職種と頻りに連携をすること	患者の状態について多職種に伝え共有すること(8)	
患者の思いや今後どうしていきたいかをしっかりとみとった情報を医師、薬剤師、作業療法士に流すこと/退院に向けてどのようなことを思っているのか、どういう治療がよいのか、患者の希望について多職種と共有すること/退院支援カンファレンスで、医師、理学療法士に患者の意思や希望を伝えること	自宅での患者の希望を多職種に伝え共有すること(4)	
カンファレンス時に多職種にとって大切な情報を簡潔に伝えること/多職種の専門チーム(認知症専門チーム)で、カンファレンスで患者の情報を伝えること/他の職種が必要とする情報をその職種に報告すること/家での活動は理学療法士に、食べることだったら言語聴覚士などに情報を発信すること	多職種が求める情報を多職種に伝えること(4)	
看護の視点から自分の意見も言うこと/看護の視点からの意見を多職種と共有すること/収集した情報を看護師間で、分析・共有すること/看護師としての分析内容を多職種に伝えること	看護師としての分析内容を多職種に伝え共有すること(4)	
家族背景について施設と情報を共有すること/退院支援カンファレンスの場で医師、理学療法士、医療ソーシャルワーカーと家族背景の情報を共有すること/家族からくみとった思いを作業療法士と情報交換すること/	家族背景や思いについて多職種と共有すること(3)	
退院後、一人暮らしなのか、老老介護なのか、介護ができるかといった情報を収集すること/退院後の生活を視野に入れて家族から情報を得ること/一人暮らしになる方は、自分で服薬ができるのか、一人暮らしに対しての不安について、訪問看護師の必要性の有無を情報収集すること/自宅に帰ってからの暮らしをどのように考えているのか、病院の検診はこれなのかを、情報収集すること/(患者についての)退院後どうしていきたいのか情報収集をすること	退院後の患者の生活について情報を収集すること(7)	専門的な視点で退院支援に向けた患者の生活について情報収集する
退院後の自宅の様子を看護師が見にいけない場合は、区役所の職員から情報をとること/退院後のことや家族のことについて情報収集をすること/事前に多職種に患者の現状からどのようにすればよいかの情報をもらうこと/専門性があり、判断しにくいため、作業療法士からの情報をとりまく/一人暮らしで食事を作るのがおっくうという男性には、患者の食事のことも聞き、栄養士に食事について話を聞くこと	多職種からの専門的な視点について情報を収集すること(5)	
転院までの看護師に患者の入院するまでの経過や家族状況、キーパーソンの有無、自宅での様子を電話で話を聞くこと/家族背景や家での生活など患者がどう生きてきたかを把握すること/(患者についての)家族背景、考え、性格などという方がということを情報収集をすること	入院するまでの患者の経過について情報を収集すること(3)	
医師に必要な患者の情報収集をすること/理学療法士、医師などが必要とする情報も意図的に把握すること	多職種が必要とする情報を収集すること(2)	
自宅の退院や転院のことに伴っての自宅の環境について、医療ソーシャルワーカー、病棟看護師の調整を行うこと/退院後の生活に関して、医師の説明と患者の反応を理学療法士に伝えてリハビリに繋げること/医師の目標が高かった時に、患者の頑張りや医師に伝えて関わりの方針を調整すること/カンファレンスを通して介護士やソーシャルワーカーと退院後の生活について話し合うこと/患者の意見や思いを、退院調整の看護師や医師に伝えるパイプ役	退院後の生活について多職種と調整すること(17)	退院支援に向けた患者・家族の意向に沿う多職種との調整
患者のあらゆる困っていることに対して、家族、医師、理学療法士との仲介役となること/医師、薬剤師、作業療法士、ケアマネージャと一緒に協調性、意見をまとめるなどの、チームの統率を図るような動きをすること/多職種からの情報を受け、多職種の中心にいること/情報を取りまとめて把握し、他部署との窓口となること/多職種間の仲介役(潤滑剤)になり連携をすること/多職種連携において、一番患者の情報を持っているのは看護師のため中心になって動くこと/中心に立って多職種と関わりながら、患者のことを考えること	多職種間の調整を中心に担うこと(8)	
職種間の意見の相違はあっても、患者にとって一番いい選択を考えて多職種と調整すること/在宅に帰りたい希望や自宅での生活とか不安を在宅へつなげていく方法を考えること/医師や理学療法士とカンファレンスし、協力し合い退院調節をすることで、患者さんと家族の意向に添うこと/ソーシャルワーカーとの連携の中で、患者の入院生活の状態を医療の知識を持ったうえで、希望に合っているか判断すること/患者が納得できるよう退院調整をすること	患者と家族の意向にそうように多職種と調整すること(7)	
職種の違いで専門性を生かした連携をとること/多職種の職種の特性を理解すること/多職種間で問題が起きたときは、(職種の)特徴を捉えて発言すること/看護師と医師で患者に伝えた情報が異なっていた時の調整/(多職種連携のために)直接話し合いお互いを理解しあうこと	多職種の特性を理解し、調整すること(5)	
自宅に戻ってから、ヘルパーや訪問看護師、ケアマネと連携すること/状況によって地域包括支援センター、社会福祉士と連携すること/介護度の申請の手続きの状況を地域の福祉の方に報告すること/継続して看護が受けられるように退院後の受け入れ施設に連絡をすること	他施設との調整をすること(4)	
退院支援カンファレンスで話し合うことを考えタイムマネジメントをすること/退院カンファレンスにおいて司会的な役割、リーダーシップをとってマネジメントすること/退院カンファレンスにおいてフォローシップをとること	退院支援カンファレンスでマネジメントすること(3)	

族背景について共有すること><家族からの思いを情報交換すること><患者の生活について伝え、共有すること><患者の状態について伝え共有すること>を学んでいた。原本ら(2016)は、保健医療福祉チームにおける看護師の役割について、看護師は患者・家族の思いを医療チームへつなげる役割であることを認識していること明らかにしている。

保健医療福祉チームの中で、看護師は患者の身近な存在として、患者・家族を理解し生活の援助を行っている。学生は、病棟看護師や退院支援室の看護師の実際の活動やインタビューを通して、看護師は、患者や家族からの情報を多くもっており、またそれを医療保健福祉チームに伝えることができる役割であると理解したと考えられる。

学生は看護師が、患者や家族からの情報を発信するだけでなく、<看護師としての分析内容を多職種に伝え共有すること>であると学生は学んでいた。北村(2011)は、看護の専門性を発揮して患者への成果を高める目的意識が重要であると述べており、患者・家族から得た情報を基に、専門性を発揮し、看護の視点から分析することで、患者・家族にとって退院支援をする上で必要なことを共有できると述べている。学生は、看護師が専門性を発揮し分析し情報を発信していく大切さに気づき、学びとして得ることができていた。

看護師は退院後の生活を視野にいれ、退院後も治療、看護が継続していけるように、入院時から関わる必要がある。川島(2011)は、患者がどこに退院していくのか、受け入れはどうなっているのかについての情報収集は、あらゆる職種に先駆けて看護が行うべきあることを指摘している。学生は、<退院後、一人暮らしなのか、老老介護なのか、介護ができるかといった情報を収集すること>、<ひとり暮らしになる方は、自分で服薬ができるのか、一人暮らしに対しての不安について、訪問看護師の必要性の有無を情報収集すること>など、退院後も患者・家族が安心して生活を送ることができるよう、家族構成や服薬管理など、先駆けて情報収集している看護師の活動を根拠に、それが看護師に必要な役割であるという、学びを得たと考える。

【専門的な視点で退院支援に向けた患者の生活について情報収集する】では、看護師の役割を<多職種が必要とする情報を収集すること><多職種からの専門的な視点について情報を収集するこ

と>であることを学んでいた。チーム医療は、患者を中心に各種医療専門職が、共通の理念を基盤に、それぞれの専門性を活かし、共通した目標に向かって協働して医療を実践することである(川島, 2011)。それがゆえに、退院後もより質の高い看護を継続していく上では、医療保健福祉チームの専門性を活かしながら、患者を支えていくことが望まれる。岡崎ら(2014)も、多職種のチームが連携・協働を行う上で必要な行為として、多職種の専門性や価値観を尊重することを明らかにしており、学生は、看護師が多職種連携をする上で、看護師の視点だけでなく、<専門性があり、判断しにくい場合、作業療法士からの情報をとりにいく>、<一人暮らしで食事を作るのがおっくうという男性には、患者の食事のことも聞き、栄養士に食事について話を聞くこと>など、多職種からの価値観も尊重しながら、患者・家族にとってよりよい退院支援について考えていた。このことから、学生は、多職種の専門性を尊重し情報を収集する必要性についても考え学ぶことができていた。

さまざまな専門性をもつ多職種の集まりである保健医療福祉チームの連携・協働していくためには、【退院支援に向けた患者・家族の意向に沿う多職種との調整】が必須である。多職種が集い患者の退院支援に向けて検討する場として退院支援カンファレンスがある。金子(2010)らは、病棟看護師が効果的な退院支援を行う因子として、退院支援チームの中心となり、効果的に進めるための調整と働きかけがひとつにあることを明らかにしている。学生は、【退院支援に向けた患者・家族の意向に沿う多職種との調整】の具体的な看護師の役割として、<退院支援カンファレンスでマネジメントすること><多職種間の調整を中心に担うこと>を学んでおり、看護師を多職種の中心的な存在として捉えていた。また<他施設との調整をすること><患者と家族の意向に沿うように多職種と調整すること>も看護師としての役割であると学んでおり、看護師は多職種の連携が円滑に機能するために、他施設や多職種と調整していることを学んでいたと考える。これらのことから、実習目標である保健医療福祉チーム内における看護師の役割について学ぶことができており、目標に沿った学習ができていたと捉える。

退院支援に向けた多職種連携における看護師の役割について、看護師に求められる役割について必要な視点を理解し、学びを得ていた。今後、学

びを深めるために、事前学習を更に強化し、広い視野から退院支援に向けて多職種連携における看護師の役割を考えることができるように、教員・指導者間の連携を保ちながら、学生の学びを広げていけるように支援していくことが課題である。

VI. 結論

学生は実習を通し、退院支援に向けた多職種連携における看護師の役割を【退院支援に必要な情報を多職種に発信し共有する】【専門的な視点で退院支援に向けた患者の生活について情報収集する】【退院支援に向けた患者・家族の意向に沿う多職種との調整】と捉えていた。このことから、学生は多職種連携において看護師は専門的な視点で情報を収集し、中心的な役割を担っていることを学んでおり、多様な視点から看護師の役割について学びを深めていることが明らかになった。

参考文献

- 舟島なをみ（編）（2007）. 「質的研究への挑戦」. 44. 東京：医学書院.
- 原本久美子（2016）. 「保健医療チームにおける「看護師の役割」とは」. 『関西国際大学研究紀要』, 17, 119-131.
- 石鍋圭子, 野々村典子, 吉田真季, 奥宮暁子, 宮腰由紀子, 土屋陽子, 川波公香, 穂積恵子（2000）. 「リハビリテーション医療における職種間連携の実態と看護婦の役割－各専門職種を対象にした全国アンケート調査より－」. 『リハビリテーション連携科学』, 1（1）, 141－149.
- 金子文, 沢村久美子, 佐藤敦子, 迫井敏美, 重永英子（2010）. 「退院支援における病棟看護師の役割－病棟看護師の退院支援に対する関わりの内容分析を行って－」. 『日本看護学会論文集地域看護』, 41, 193－196.
- 川島みどり（2011a）. 「チーム医療と看護－専門性と主体性への問い」. 34. 東京：看護の科学社.
- 川島みどり（2011b）. 「チーム医療と看護－専門性と主体性への問い」. 12. 東京：看護の科学社.
- 北村愛子（2011）. 「チーム医療のありかたと看護師に期待される役割」. 『看護展望』, 36（1）, 15-21.
- 厚生労働省（2017）. 「チーム医療推進について」. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/s0319-9.html>（最終参照日：2017年06月11日）
- 丸岡直子, 佐藤弘美, 川島和代, 伴真由美, 小松妙子（2004）. 「退院患者に提供された看護サービスの実態からみた退院調整における病院看護師の役割」. 『石川看護雑誌』, 1, 31-38.
- 岡崎美晴, 江口秀子, 吾妻知美, 神谷美紀子, 遠藤圭子, 服部兼敏（2014）. 「チーム医療を実践している看護師が多職種と連携・協働する上で大切にしている行為－テキストマイニングによる自由記述の分析－」. 『甲南女子大学研究紀要』, 8, 1-11.
- 袖山悦子, 志田久美子, 小林由美子, 北谷幸寛（2012）. 「高齢者ケアを実践している専門職の専門性・弱点に関する認識と多職種連携」. 『新潟医療福祉学会誌』, 12（2）, 41－47.